

2019年3月23日(土)

シンポジウム「『終わる』ということから生活を考える」

## 生活者としての終わり方 —現象学的な視点から考える—

生活経済学会 中部部会  
春の小研究会(於:名古屋学院大学  
名古屋キャンパスたいほう)

※本報告のテキストについては次のサイトを参照してください。  
<http://harlock.web.fc2.com/>

## 「生活者」とは誰か —先行研究概観—

## 目次

- 「生活者」とは誰か—先行研究概観—
  - 御船美智子の「生活者」論
- 普通の人間をどうやって分析するのか
  - 主観—客観問題
  - 真・善・美の判断
  - 生活世界あるいは世界内存在の概念
  - 御船の「生活者」への適用
- 生活者としての終わり方:「引きこもり」問題
- 実証方法としての首尾一貫感覚(SOC)

2

## 「生活者」とは誰か

- 「生活者」という用語の研究を学術レベルにまで高めた研究者の1人は天野正子氏である。
- 1985年に生活経済学会が設立されて、「生活者」を研究対象とする唯一の経済系学会となった。
- その後、原司郎・酒井泰弘(1997年)、大藪千穂(2012年)、生活経済学会編(2017年)等の多くの先行研究が出されてきた。

4

## 御船美智子の「生活者」論

- 御船氏の「生活者論」は、原司郎・酒井泰弘編著『生活経済学入門』（1997年）の第3章として展開されている。
- 御船氏の「生活者」の概念を議論の出発点にする理由は次の2点である。
  - 「消費者行動理論」との二分法的な対立概念ではなく、連続的概念として捉えている。
  - カント以降の哲学や20世紀の現象学の成果が適用し易い。

5

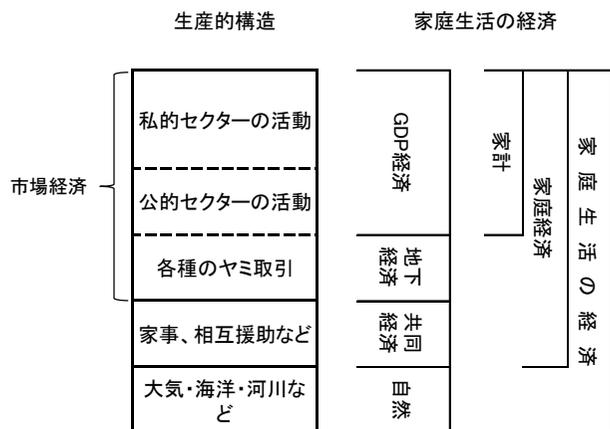
## 御船の「生活者」のイメージ

- 御船は「生活者」を「あるがままの人間」と呼んだ。
  - 「消費者はただ効用の極大化を目指し、生産者はひたすら利潤の極大化を図るものと想定し、それ以外の「余計なこと」は考えないとしているようだ。だが、まさにこの「余計なこと」の中にこそ、ドロドロとした現実経済の真の姿があるのではないだろうか。」(p.52)と説明している。

6

## 「家庭生活の経済」とは

御船の経済範囲



(出所) 御船の図3.1を簡略化したもの。

7

普通の人間をどうやって分析するの？

カント哲学～現象学の適用

## 人間の意思決定

- 人間の意思決定＝判断の方法を知る必要がある。
- 古来から哲学では、人間は、①真偽の判断、②善悪の判断、③美醜の判断、3つの知的判断をすると考えられてきた。
- それらがどのようなものかを確認する前に、主観－客観問題に触れておく必要がある。

9

## 主観－客観問題

- 伝統的経済学を含むあらゆる科学は、普遍的客観的法則を求めている。
  - つまり我々の世界には(神が創った)秩序や合理性があり、人類はそれを少しずつ発見してきたという考え方がある。
- これは「世界そのものに客観性が備わっている」と考えていることを意味する。
  - 人間は主観的経験的な生き物かもしれないが、一生懸命に論理的に思考することによって、元々世界に備わっている客観性を発見することができる。

## 主観－客観問題(その2)

- この考え方を最初に覆したのが哲学者カントであった。
- 彼の哲学を一言で表せば、
  - 人間は経験的(つまり主観的)にしか外的内的観念(イメージ)を持ってない。
  - しかし、人間の知性の中に共通のフォーマットや思考回路が先験的(アプリアリ)に備わっている。
  - その先験的な共通の心的能力で捉えた部分が客観である。→もともと客観的な世界が存在している訳ではない！

11

## カント哲学: 真偽の判断

- 周知のように、カントは『純粋理性批判』の中で、人間の心的能力を「感性」(sensitivity?/ギリシャ語 ethos)、「悟性」(understanding)、「理性」(reasoning)の3つに分解した。
- 「感性」は自分の内部また外部から経験的イメージを取り込むが、その形式は「空間+時間」(内的イメージは「時間」のみ)以外にはない。
- この形式はすべての人間に先験的(アプリアリ)に備わっているため、幾何学という学問が成立する。

12

## カント哲学：真偽の判断（その2）

- 次に、「感性」から受け渡されたイメージは、「悟性」で分析される。
- 「悟性」は、カテゴリー表と呼ばれる論理形式に従ってイメージを理解（＝認識）するが、このカテゴリーも先験的に人間に備わっている能力である。
- 論理学が学問として成立するのは、このお陰である。
  - 従って、「海は青い。」の真偽は判定できない。→主観
- 最後に、「理性」は概念同士、または概念とイメージを組合わせて推測する能力であり、人間は意識しなくても勝手に推測する。→神も井戸端も理性能力。

13

## カント哲学：善悪の判断

- 善悪（道德）の判断とは価値判断であり、本来は主観的である。カントは客観的な価値判断をする方法を調べた。
- それが定言命法である。
- まず、自分に対する命令文（格律と呼ぶ）を考える。この格律は経験に依存したものでも構わない。
  - 例えば、「私は早寝早起きをすべきである。」という格律を考える。

14

## カント哲学：善悪の判断（その2）

- 次に、「あなたの格律が普遍的な立法原理となるように行為しなさい」という定言命法を適用する。
  - ここで、普遍的な立法原理とは、普遍化しても矛盾を含まない規則のことを言う。
  - 先の例では、「人は早寝早起きすべきである。」という判断基準となる。→この例がなり得るか否かは微妙？
- この判断基準は自由法則（道德法則）と呼ばれ、快楽に溺れるという自然法則に対抗する唯一の手段となる。
  - 快楽に支配される者は不快にも支配される！

15

## カント哲学：美醜の判断

- カントは、悟性と理性の中間に位置する心的能力、すなわち判断力があるとした。
- 判断力には次の表にもとづく4つの種類がある。

	美学的判断力	目的論的判断力
内的な合目的性	趣味判断（美の判断）	目的の判断
相対的な合目的性	崇高の判断	有用性の判断

- 判断力の種類には美学的判断力と目的論的判断力の2つがある。

16

## カント哲学：美醜の判断（その2）

- **美学的判断力**とは、次に説明するような**自然の合目的性**を人間がその主観的な根拠にもとづいて感受する能力のことである。
- **目的論的判断力**とは、混沌とした素材から、しかも無限に多様であって人間の理解力に適合しないような素材から、完全な連関を保つ経験を作り出す能力のことで、要約すれば、自然が秩序を備えているように見える能力のことを指している。

17

## カント哲学：美醜の判断（その3）

- 次に、**自然の合目的性**とは、あるものがその目的にふさわしい性質を持っていることを言うが、**内的な合目的性**と**相対的な合目的性**とがある。
- **内的な合目的性**とは、対象そのものに合目的性が存在していることを言う。
- **相対的な合目的性**とは、その対象には合目的性が備わっていないにもかかわらず、主体である人間のうちにある目的の観念が生まれてきて、対象がその目的に適うように感じられることを言う。
- 以上の分類から、**趣味判断**、**崇高の判断**、**目的の判断**、そして、**有用性の判断**の4つが導かれる。

18

## カント哲学：美醜の判断（その4）

- **趣味判断**とは、古くから哲学のテーマとなっている**美醜の判断**のこと言う。
  - 例えば、「この花は美しい」という総合判断のことを指す。
  - これは**社交性の原理**を意味する。
- **崇高の判断**とは、高度な数学や物理学のような難解な概念を見た場合や、大震災のような人知を超えた出来事に出くわした場合に感じる判断のことを言う。
  - これは**畏敬の念**を意味する。

19

## カント哲学：美醜の判断（その5）

- **目的の判断**とは、純粋な知性による形式判断を補うもので、例えば「ある動物が哺乳類に属するか、魚類に属するのか」を分類する場合を言う。
- これは、人間には多様なものの中から親縁性を見いだす能力があることを示している。
- **有用性の判断**とは、そのものに目的がある訳ではないが、人間がそれを利用しようとする、まるで人間の目的に適うために存在しているように見えることを言う。
  - 例えば、寒冷地の海岸に流れ着いた流木は、人間の役に立とうと現れたように見えることである。

20

## カント哲学から現象学へ

- カント哲学は人間の知性の使い方を説明したが、それは学者や修行僧のような知性の部分のみを扱っており、俗人の日常とは違う。
- また、「物自体」の世界の存在を仮定しているのも不自然である。
- 現象学は20世紀に入って確立された人間の日常性からアプローチした認識論または存在論である。

21

## 生活世界あるいは世界内存在とは

- デカルトは省察(内省)することで自分の存在を証明した。
- しかし、自分はどこに存在しているのだろうか？
  - カントは人間が完全には認識できない「物自体」の世界だと考えた。
- この疑問に対するハイデカーの答えは、自分の経験が作り上げた世界の中である。
  - つまり人によって異なる主観的世界の中である。

22

## 生活世界あるいは世界内存在とは(その2)



デカルトの存在証明



ハイデカーの存在証明



「考えている私」を観ている私=現存在(意識)

日常的には「考えている私」の視点は「それを観ている私」の視点と一致。

23

## 生活世界あるいは世界内存在とは(その3)

- 対象物としての存在者が「配慮的気遣い」によって関係づけられて世界を、**世界の世界性**と呼ぶが、その中で存在する現存在は、「**情状性**」(気分)を直感することを本質とする存在である。
- 「**情状性**」は日常的なさまざまな気分であり、高揚した気分もあれば、落ち着いた気分もあり、更に、不快な気分もある。

24

## 非本来性と頹落

- ハイデカーが特に着目したのは日常的な特に理由のない**倦怠感**である。
  - つまり何となく「けだるい気分」である。
- ハイデカーはその気分の理由を**死に対する不安**に求めている。
  - 「自分は何のために生まれてきたのか」とか「死とは何であるのか」とか言った非常に重い意識は気分を重くするが、このことが「自分(現存在)は否応なしに存在してしまっている」という「**被投性**」を開示する。

25

## 非本来性と頹落(その2)

- そのために、人は日常性の中に埋没することによって逃避して生きている。
- ハイデカーは、このように人が「**非本来性**」の中で生活している状態を特に「**頹落(たいらく)**」と呼んだ。
  - 「**頹落**」が人間生活の特殊な状態を指しているのではなく、むしろ日常の状態である。
- ハイデカーは「**頹落**」の具体的状態として、「**空談**」、「**好奇心**」、そして、「**曖昧性**」を例示している。

26

## 御船の「家庭生活の経済」への適用

御船の経済範囲		哲学的現象	
GDP経済		本来性	非本来性
市場経済	家庭生活の経済	個人的便益(快不快)の判断	好奇心
公共経済		社会的善悪(道德)の判断	曖昧さ
共同経済		趣味判断	空談
人間関係 自然環境		崇高の判断	曖昧さ
地下経済		社会的善悪(道德)の判断	曖昧さ+有用性の判断

(出所) 御船図3.1に筆者が手を加えたもの。

(備考) 好奇心 目移り、気が散っていること

曖昧さ 他人事、本当に深刻には受け止めていない

空談 どうでもいい語り

27

生活者としての終わり方:  
「引きこもり」問題

## 企投なき被投性

- ハイデカーは「**先駆**」によって「**頹落**」から呼び覚まされ、本来の自分を思い起こした現存在(この状態を「**企投**」と呼ぶ)は、「**良心**」の呼びかけを聴くとしている。
  - 「**先駆**」とは、自分が死すべき存在であるという自覚である。
- レヴィナスは「**企投**」を持つことの不可能性、「**企投**」なき「**被投性**」を主張し、壊れものとして人間を描いている。
  - これは「**引きこもり**」と見なすことができるかもしれない。

29

## 宗教経済の追加

- 御船が主張する「**家庭生活の経済**」をその人の「**世界の世界性**」に近いものだと仮定すれば、「**市場経済**」、「**公共経済**」、「**共同経済**」、「**環境**」、および「**地下経済**」の構成は人によって大きく異なる可能性がある。
  - 特に、人の生涯を見通したとき、加齢と共にそれらの構成が変化するのはむしろ自然であろう。
  - 従って、「**生活者としての終わり方**」とは、現役生活から退職生活、そして、**終活に向かって「家庭生活の経済」構成をどのように変化させて行ったらよいのかという問題**に置き換えることができる。

30

## 実証方法としての首尾一貫感覚 (SOC)

## 首尾一貫感覚 (SOC) とは何か

- この問題を考えるにあたっては、もう少し実証的なアプローチを紹介したい。
- **首尾一貫感覚** (Sense of Coherence、以下では **SOC** と呼ぶ) は、医療社会学者アーロン・アントノフスキーによって提唱された **ストレス理論** である。
- **SOC** とは、**世界[生活世界]を、・・・予測可能で把握可能なものとして**あるいは「**形式 (form) と構造 (structure)**」をもったものとして、「**法則性 (lawfulness)**」のあるものとして「**みる見方**」であると定義される。

32

## 首尾一貫感覚(SOC)とは何か (その2)

- この概念は、具体的には、
  - **把握可能感**: 人が内的環境や外的環境からの刺激に直面したとき、その刺激をどの程度認知的に理解できるものとして捉えているかということ、
  - **処理可能感**: 人に降り注ぐ刺激に見合う十分な資源を自分が自由に使えると感じている程度のこと、
  - **有意味感**: 人が人生を意味があるものと感じる程度のこと、「これは不幸な経験が課されたとしても、その挑戦を進んで受け止め、それに意味を見い出そうと決心する」志向の程度のこと、

の3つの構成要素によって計測することができる認知的な特性のことである。

33

## SOCと引きこもり

- 「**引きこもり**」のは、生活環境の変化というストレスに耐えられなくなった人である。
  - 把握可能感が高いにもかかわらず有意味感が低い場合には、世界が見えているだけに白けた気分になるであろう。
  - そのとき、サポートしてくれる人を見い出せなければ、つまり処理可能感も低ければ、絶望的な状況に追い込まれるに違いない。
  - おそらく「**引きこもり**」になる人はこの状態か、3要素とも低い状態のいずれかと思われる。
  - 人が会社を定年退職した後、何に生きがいを見い出すのか、そこが問われている。

34

## 全国代表サンプル調査の分析

- **SOCと生きがいの関係**について、横山による比較的大規模な実証分析の結果を引用して、考察しよう。
- 横山は**個人の社会関係がSOCに影響を及ぼす**と仮定し、
  - ①社会的サポートの有無、
  - ②近い人の存在、
  - ③地域活動への参加状況、
  - ④生きがいと感じられる活動の種類、

の4つの項目に着目し、②から④については計測したSOC値を対象群と参照群とに分けて示している。

35

## 全国代表サンプル調査の分析 (その2)

- まず、**配偶者とSOCの関係**では、男女とも未婚者は既婚者より優位にSOCのスコアが低いことを確認している。
- また、**地域活動とSOCの関係**では、趣味のサークルやボランティア活動など水平的な地域活動について、男女とも、参加していないグループ群より2つ以上参加しているグループ群の方が有意にスコアが高いことを発見した。
- しかし、自治会やPTA、宗教関係など垂直的な地域活動では、もともと参加率が低い男性では2つ以上参加しているグループ群の方が有意にスコアが高くなることが確認できたが、女性では有意な差は見られなかった。
- 更に、**生きがいの有無とSOCの関係**では、男女とも「**地域のボランティア活動**」が生きがいだと答えたグループ群は、「該当しない」と答えた対象群に対して有意に最も大きなスコアの差を示し、続いて「**宗教**」が生きがいだと答えたグループ群が対象群に対して大きな差を示すことが分かった。

36

# むすびに代えて

- 本稿では20世紀に展開された現象学の成果を取り上げ、それを「生活者」の概念に適用した。
  - 「生活者」とは「ありのままの人間」であるが、彼らは好むと好まざるとに関わらず生きて行かなければならない存在である。
  - 故に、彼らは一日中、合理的な利得計算をしながら意思決定している存在でなく、むしろ日常的な事柄の多くは習慣や惰性、気まぐれに任せて何となく生きている存在であると言えよう。
  - 現在、地域包括ケアシステムの構築が急がれているが、この取り組みの主要な部分は住民同士の相互扶助、すなわち、「共同経済」の構築にあると考えることができる。
  - しかし、ボランティアへの参加率は低く、「引きこもり」が益々深刻な問題となること考えれば、一人でも参加できる「宗教経済」の構築もまた必要であろう。
  - これは昔の「宗教経済」の復権とは違う。死後に備えて自分で好みの葬儀場を予約しておいたり、生前にお墓を立てたりする終活が着目されている理由もそこにあるかもしれない。

37

# 参考文献一覧

- [1]イマニュエル・カント著 石川文康訳『純粋理性批判 上・下』筑摩書房 2014年。
- [2]イマニュエル・カント著 中山元訳『実践理性批判 1・2』光文社古典新訳文庫 2013年。
- [3]イマニュエル・カント著 牧野英二訳『カント全集9 判断力批判 下』岩波オンデマンドブックス。
- [4]エドムント・フッサール著 細谷恒夫・木田元訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論新社 1995年。
- [5]エマニュエル・レヴィナス著 西谷修訳『実在から実在者へ』ちくま学芸文庫 2005年。
- [6]奥野正寛・鈴木興太郎『モダン・エコノミクス1 ミクロ経済 I』岩波書店 1985年。
- [7]大藪千穂『生活経済学』放送大学教育振興会 2012年。
- [8]鎌田 繁則「労働の喜びと余暇からの不安について—現象学的経済学の視点から過労死問題へのアプローチ—」名城大学総合研究所『紀要』23号 2018年。
- [9]鎌田 繁則「幸福論としての社会福祉論について—現象学的経済学の構築に向けて—」名城大学総合研究所『紀要』23号 2018年。
- [10]生活経済学会『共通論題/パネルディスカッション記録「生活経済学における「生活」論の構想—「終わる」ということから生活を考える—』生活経済学研究 第46巻 2017年9月。
- [11]生活経済学会『地域社会の創生と生活経済:これからのひと・まち・しごと』ミネルヴァ書房 2017年。
- [12]竹田青嗣『完全解説カント「純粋理性批判」』講談社選書メチエ。
- [13]竹田青嗣『完全解説カント「実践理性批判」』講談社選書メチエ 2010年。
- [14]中山元『自由の哲学者カント カント哲学入門「連続講義」』光文社 2013年。
- [15]マルティン・ハイデッカー著 原佑・渡邊二郎訳『時間と存在 I～III』中央公論社 2003年。
- [16]原司郎・酒井泰弘編著『生活経済学入門』東洋経済新報社1997年。
- [17]御船美智子「第3章 生活者と現代生活—いろいろな視点から考える—」原司郎・酒井泰弘編著『生活経済学入門』東洋経済新報社1997年。
- [18]村上靖彦『レヴィナス 壊れものとしての人間』河出ブックス 2012年。
- [19]横山由香里「第6章 SOCが高い人に見られる社会とのかかわりとは—他者とのかかわり・地域活動への参加を中心に—」山崎喜比古監修・戸ヶ里泰典編『健康生成力SOCと人生・社会—全国代表サンプル調査と分析』有信堂 2017年。
- [20]Antonovsky, Aaron, “Unraveling The Mystery of Health—How People Manage Stress and Stay Well”, Jossey-Bass, 1987.